

第38回日本のうたごえ全国協議会総会

方針

はじめに

今年、被爆・戦後60年、日本の進路にかかわる歴史的な節目の年を迎えた。おりしも改憲への動きが現実化し、日本は「平和な国」と「戦争する国」を巡り、大きな岐路に立たされている。

その激動の中で、私たちは04年日本のうたごえ祭典^①おきなわ（以下、おきなわ祭典）の成功と、「うたごえは平和の力」をさらに強く押し進め、うたごえを響かせてきた。

イラク戦争反対では、3月、数百万人が参加した「イラク戦争やめる」の国際行動に全国各地から一斉に「NO WAR」のうたごえを響かせたのをはじめ、街頭で集会で演奏会等で平和のうたごえを響かせた。また、憲法改悪の策動が急速に強められる中、平和憲法を広げ、九条をまもる演奏普及、演奏会をすすめた。

そうした「イラク戦争反対、憲法をまもろう」のうたごえは「基地のない平和な沖縄を」の思いとたたかいを結び、おきなわ祭典は、「沖縄のうたごえ運動の再出発の展望を切り開いた」（宮城正明運営委員会代表委員）祭典として、うたごえ祭典の持つ力をあらためて実感させるものとなった。歌い、つくり、広める創造性豊かな運動、サークル・合唱団の演奏会の広がり、それを結ぶうたごえ新聞、合唱発表会、協議会活動をはじめとする組織を大きくする活動も、地道にすすめられた。

うたごえ運動は、08年に創立60周年を迎える。今総会では、運動が生み出した成果をみんなのものにし、いつそう輝かせ、うたごえ創立60周年に向かう05年方針を決めたい。

私たちがとりまく情勢

アジアで二千万人、日本で三百万人の犠牲を生んだ戦争への深い反省から、二度と戦争をくり返さないとの決意をこめて生まれた憲法を踏みこじり、日本を戦争のできる国にするための憲法づくりが動きを早めている。

イラク戦争が開始されて2年。アメリカ軍によるファルージャでの無差別攻撃に表れているように、戦争は多くの市民を犠牲にし、またテロの温床を広げている。「大量破壊兵器の発見」という虚偽の口実のもとで不法な戦争がすすめられる中、イラクに軍隊を派遣した37の国のうち、軍隊を撤退、または考えている国が16カ国生まれているにもかかわらず、日本政府は国民の大きな反対を無視し自衛隊のイラク駐留を延長させた。

このようにいつでも自由に軍隊を外国に送り出せるようにするために、その足かせとなつてゐる憲法九条を変える「憲法草案」づくりが政党や財界から起こつてゐる。そして子どもたちに「愛国心」をうえつけ、「日の丸」「君が代」を強制し、国の言うがままになる教育をすすめるための教育基本法の「見直し」が本格化している。NHK番組への政治家の介入が暴露されたように、歴史の真実を覆い隠し、国民の知る権利や表現の自由をうばうマスメディアへの統制も強められてゐる。

日本の良心を代表する文化知識人9人による「九条の会」からのよびかけは、全国で急速にひろがり続けている。憲法九条を改定し戦争ができる国に書きかえる企てに反対し、九条を21世紀の世界平和の羅針盤として輝かせることが強く求められている。

核兵器のない世界、ヒバクシャをつくらぬ世界は、60年前にヒロシマ・ナガサキの悲惨な体験をもつた日本国民の悲願である。今年5月にはアメリカでNPT再検討会議が開かれるが、平和を願う様々な団体や個人との共同をひろげ、「憲法まもれ、核兵器をなくそう」の声を今こそ大きくひびかせたい。

これからの2年間で新たに7兆円もの負担を国民に強い、さらに2007年には消費税を大幅に引き上げようとする政治の方向は、私たちの暮らしや経済を脅かすだけでなく、破壊につながるものである。一方では、「経営改善」の名のもとにリストラが横行し、働くものの権利をおさえ低賃金で働かせる動きがいつそう強まっている。自殺者が6年連続3万人を越えている異常な社会は、幼い子どもの命を守れない状況ともつながり、政治のゆがみが立場の弱いものに向かい、社会的な不公平を拡大している。

こうした中で、サービス残業を許さず働くことでの権利を勝ちとる勇氣あるたたかいが前進し、特に劣悪な状況におかれてゐる青年の中で怒りが渦巻いてゐる。新潟県中越大地震では、多くの青年がボランティアとしてかけつけ、被災者を励まし人間の連帯の大切さを示した。

「人間社会を平和にする力を率先して發揮するのが文化・芸術です」(映画作家・大林宣彦氏)。人間らしさや生きる勇氣を伝え、感動を連帯につなげていく上で、文化は大きな役割をもつてゐる。「文化が生活に根づいた島は、いつも元気で美しい」の言葉をもつ沖縄での日本のうたごえ祭典は、そのことを鮮やかに示した。

「戦争のない世界」を願う世界の声は、太い流れとなつて動いてゐる。ヨーロッパやラテンアメリカ、アジアで、アメリカ一国による世界支配を許さず、「国連憲章にもとづく平和の国際秩序を」のたたかいが前進している。こうした世界の人たちと心を合わせながら、うたごえをより高らかに世界に向かって響かせて行きたい。

2004年度 活動のまとめ

「方針1」人々のねがいと結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、「共に生きる町づくり・地域づくり」のうたごえを広げる

「1」演奏・普及

自衛隊イラク派兵、憲法九条改悪への動きの中、軍事費拡大の戦争をする国に進むか、福祉・暮らしを充実する国づくりを進めるか、国の進路が問われた1年のなかで、うたごえ運動は、平和と生活・生存をまもる人々の運動と共に、大小様々な集会、平和コンサート、うたう会、ピース・ウォーク、ピース・パレードでうたごえを響かせた。04年は日本の米軍基地の75パーセントが置かれている沖縄での日本のうたごえ祭典に向け、憲法・沖縄をテーマにサークル・合唱団の演奏会も開かれ、沖縄のうたごえを飛躍させる礎として祭典を成功させた。

〈1〉 “うたごえは平和の力” 自衛隊のイラク派兵反対、憲法九条をまもる運動とともに

〈3・20国際共同行動〉なかでも世界数百万人が参加した「3・20国際共同行動」では全国各地で大集会、街頭アピール、米軍基地包囲ヒューマン・チェーンなどの行動に参加して歌を広めた。それら各地の行動が即日、うたごえ新聞に送稿され、4/20号は5ページを通信で埋め、全国の画期的なとりくみを反映した。各地で「ヒロシマの有る国で」をはじめ「STOP THE WAR」「Love and Peace」等「私たちは歌いつづける」「ねがい」「その手の中に」「青い空は」「今この時代に」「翼をください」「世界に一つだけの花」等の歌が歌い広められた。

協議会単位による大集会での行動から、「自分たちも何か行動を、まずはじめの一步を」と駅前行動を始めた西宮女声コーラスこぶし、子どもたちと一緒に横断幕をかかげて行動した豊川親子合唱団たけのこ。自衛隊派遣物資輸送船が出航した室蘭では室蘭合唱団あすなるが「アメイジング・グレイス」をバックに九条を朗読、自衛隊駐屯地旭川空自第3師団が発した旭川では合唱団ペニ・ウン・クルが「ヒロシマの有る国で」を演奏した。

毎週金曜日、練習前30分の駅前演奏活動を続けている国鉄東京合唱団の活動にヒントを得て、千葉・合唱団プリマベラでは月一回の団運営委員会前に駅頭での演奏を開始するなど、継続的なアピール活動も行われた。

〈憲法九条をまもる活動〉「日本国憲法第九条」をはじめ、各合唱団の演奏会も「そして一輪の花のほかは：あたらしい憲法のはなし」など「憲法」をテーマに企画された。女性コーラス・レガータが「レガータ内9条の会」を発足。憲法学習会も開き、歌と一緒に「9条飴」を普及など創意ある取り組みが行われている。また、「日本国憲法前文」を歌うシンガー・ソングライターきたがわてつさんとともに「憲法大好きキャンペーン」(第一弾、03年11月から04年5月)が山形、千葉で開かれたのをはじめ、「君よ五月の風になれ」など憲法を歌うフオーク・シンガー・笠木透さんとの憲法コンサートも茨城をはじめ開かれた。

〈被爆60年、いのち輝け憲法九条『平和のうた』募集〉9月には被爆・戦後60年を機に、「世界中に平和を 21世紀の羅針盤・憲法九条のうたを」とうたごえ運動として新しい平和の歌創作募集にとりくんだ。10月末日しめきりの詞募集には87編が寄せられ、その詞をもとに曲募集

がとりくまれた。

〈平和コンサート、他〉各地で開かれた平和コンサートでは、10年前の日本のうたごえ祭典ピースウェーブコンサートひろしまを引き継ぎ、広島で毎年開催のピースウェーブ・コンサート04年は、混声合唱組曲「悪魔の飽食」の他、世界30カ国語に訳され広がる「ねがい」を台湾の高校生、ケニア、イランからも参加して演奏した。

混声合唱組曲「悪魔の飽食」全国縦断コンサートは5月沖縄、7月長野で行われた。沖縄では合唱連盟が中心になりとりくまれ、その成功がおきなわ祭典成功への大きな力になった。長野公演はこの間開かれてきた長野平和音楽祭をベースに市民合唱団の共同をさらに進めた。宮城のうたごえは原爆症認定集団訴訟を支援する組曲「あの夏の日から」を市民レベルに広げて初演し、被爆・戦後60年の活動につなげた。

京都うたごえ協議会は、京都のうたごえ創立55周年運動を、ムーブメント「わたしの平和」音楽会シリーズとしてとりくんだ。府下3000人から「わたし発」の平和のひと言メッセージを募り、それをもとに歌を作り、広げる活動にとりくみ、各サークル・合唱団の演奏会もそこにつなげ、22曲の歌が生まれた。この歌を歌う「京都・わたしの平和合唱団」結成。おきなわ祭典出演、05年の京都のうたごえ55GoGo!フェスティバルにつなげ、協議会活性化にもつなげている。

〈3・1ビキニデー、平和行進、原水爆禁止世界大会〉

被爆60年の05年を核兵器も戦争もない世界を実現する大きなうねりの中で迎えようと、04年の平和の行動がとりくまれた。多くの青年たちがこれらの運動に参加し、その中でうたごえも参加者の心をひとつにし、勇気と確信を与える大きな役割を果たした。

被災50周年3・1ビキニデーは全国各地から集まった青年による「平和でナイト」での「STOP THE WAR」「世界に一つだけの花」の演奏、原水協集会での静岡のうたごえによる「Love and Peace」や和太鼓の演奏、ビキニ・デー集会での静岡のうたごえ全県からの参加と全国のなかまも加わっての「海に生きたあなたよ」他の演奏で集会を盛り上げた。

国民平和行進では、通し行進に参加した青年たちを励ますメールの交換などを通じ、うたごえがあることで行進者も励まされ、沿道からの注目も違うことが各地から報告された。毎年うたごえ協議会として位置づけ、県内通し行進者、歌のリーダー、伴奏者を毎日配置して旗をつないだ愛知をはじめ、各地のうたごえサークル・合唱団のとりくみは大いに歓迎され、平和歌集「STOP THE WAR」、祭典歌集「うた・うた・うた」も活用された。全国で、この行進の規模と意義に見合ったとりくみが求められる。

原水爆禁止世界大会（広島・長崎）―広島では、「ねがい」があたかもテーマソングのように多くの集会で歌われ、イランのマリアンさん、ケニアのゴードンさんも一緒に歌う姿は、この曲の世界的な広がりを実感させるものとなった。長崎では「海外代表歓迎文化の夕べ」が開催され、長崎オペラ協会メンバーによる演奏、長崎のうたごえ、九州のうたごえによる「アメイジング・グレイス」「平和の旅へ」の演奏は、海外代表からも大いに喜ばれた。

これらのとりくみでつながった青年たちが各地で報告会を行い、そこにうたごえが響いていく状況も生まれ、さらにおきなわ祭典参加にまでつながったことは画期的である。

〈2〉 職場から憲法をいかすうたごえ

埼玉のうたごえが支援してきた雪印食品一般労組の争議、11月勝利解決。98年の日本のうたごえ創立50周年大阪ドーム祭典を機に結成した「友よ闘ってこそ明日がある合唱団」の団員も闘う大阪の関西航業争議団、同じく大阪のうたごえがミュージカル「幼稚園」でとりあげ、支援してきた幼稚園教諭中村華奈子さん、と人間らしく生き、働くために、思想差別・不当労働行為を正す裁判闘争が相次いで和解・勝利した。関西航業争議団の東京本社前行動には東京のうたごえが応援に入った。純利益1兆円の大企業トヨタ自動車のなかで活動するトヨタ車体労働者うたごえは新作「ラインマン」を完成。春闘に向けたトヨタ総行動では西三河青年合唱団、名古屋青年合唱団とともに本社デモ行進で「みんな元気か」「翼をください」を演奏。地元でのイラク派兵反対集会にも参加。

仙台合唱連盟「男の合唱まつり」にも出演した国鉄・仙台D51合唱団や兵庫の労働者合唱団「みんな元気か合唱団」の学校公演の活動。03年医療のうたごえ祭典愛知開催で新サークル2団体を発足させ、創作活動も活発な医療・合唱団マ・モルテはサークルと共に第6回全国民医連学術研究交流集会で民医連40年の歴史を歌う「どろ水の中から」演奏などの活動がある。私鉄のうたごえは私鉄バス全国交流集会での開幕演奏を、地域の大阪北部センター合唱団とともに成功させた。

春闘期のメーデー歌集普及では03年に続き、東京・東部のうたごえは各サークルで曲を分担してのうたごえが行われ、大阪では途絶えていたメーデー前夜祭が復活。うたごえ喫茶でメーデー歌集をとりあげられる普及活動も行われた。

しかし、職場合唱団の独自演奏会、産業別祭典開催地での普及は積極的にとりくまれたが今、職場の中の文化活動はとりくむことが難しい状況にある。その中で地域と共同しての普及活動、大阪教職員組合では教育研究集会に向けて「子どもを守る歌」合唱隊が生まれ、集会后も演奏依頼が続いている。職場に憲法を、九条の改悪阻止を、働く場から歌でアピールしていく活動が求められる。

〈3〉 人々のねがいつなぎ・憲法をいかすうたごえ

〈ながの祭典から〉03年日本のうたごえ祭典「ながの」の成功で協議会が活性化している長野では、長野合唱団とのLove and Peaceコンサートが北アルプス合唱団、岡谷はとで行われ、松本中央コーラスも初の独自コンサートを開き、発展させる活動が引き継がれた。また、長野合唱団の歌での応援活動に長野県身体障害者リハビリテーションセンターから30周年記念感謝状が贈られた。

〈様々なたたかい・願いと結んで〉和歌山では煙樹が浜の自衛隊地雷訓練基地化反対運動の中で和歌山うたごえオールスターズが「恋人たちの浜」煙樹が浜」他を創作し、合唱団が美浜の自然を守る会の中に誕生、おきなわ祭典にも出演。年金改悪・大増税反対集会で「みんな元気か」を演奏（愛知、青森、福岡）、奈良蟻の会合唱団の病院コンサート、健康まつりで静岡のうたごえ仲間TOMOは創作曲を、北九州おかわうたごえは蛍鑑賞会で「蛍の歌」を、諫早工事差し止めを求める運動での大牟田センター合唱団の「海に抗う者」などが普及された。

全国教職員学習交流会（愛知）では「教育基本法の歌」「ぞうれっしやがやってきた」を愛知子どもの平和と幸せを願う合唱団はじめ、県下の「ぞ

う」合唱団、三重の教職員合唱団すいすいごんぼ等で演奏。04年も市民公募での「ぞうれっしや」公演は大阪、兵庫、新潟、神奈川等で開かれた。京都こども音楽会は21回目を行い、ハンブルでの民謡と歌など国を超える文化交流も企画された。

大阪北部のうたごえは労働学校での歌唱指導や、北摂地域3カ所でのうたごえ喫茶開設など、平和・自然・暮らしをまもるさまざまな要求、願いと結んで演奏普及活動が行われた。

〈うたごえ喫茶〉うたごえ喫茶開催が増えている。商店街の活性化としても市民権を得ている新日鉄八幡うたごえの青空うたごえは、多治見青年合唱団の「うたごえキャンプ」募集にも位置づけた開催。年金者組合ではうたごえ喫茶を起点に、うたごえが広がっているなど、生活の場で歌を求める人々の要求がわき起こっている中でうたごえ運動のイニシヤチブが求められている。

〈地域に歌を広げる活動〉東播センター合唱団は04総会方針「全市町にうたごえを」の実践として、団の創作組曲「加古川」の加古川流域7市10町での「みいにコンサート」開催を計画、その第一弾が8月、加美町で行われた。準備の過程で次々に新たに合唱団との出会いが生まれている。京都ひまわり合唱団友会(団OB)の「運動の歴史をたずねる・故郷めぐり」が鳥取で2カ所行われ、かつてのうたごえ仲間も集い、鳥取にうたごえが発足している。

04年を表す漢字は「災」とされたように災害が地球規模で多発し、うたごえサークル・合唱団員も被害を受けた。阪神大震災10年、被災地の神戸青年合唱団、神戸市役所センター合唱団、阪神センター合唱団、西宮さくらんぼ合唱団など、心の復興へとコンサートを開いている。また、中越地震支援では東京・コールかるがも、被災地川口町と姉妹都市の狛江市では調布狛江合唱団も参加してチャリティコンサートが開かれた。

2月、有事法制に反対する日本ペンクラブの緊急集会が東京で行われ、会長の井上ひさし氏は、ナチ収容所の実態を研究している精神科医V・E・フランクルのことばを引いてこう語った。「ガス室で人を殺すことを考える人間がいる。一方で、その処刑場へ人の身代わりになって、歌を歌って行く人がいる。だれかの作った地獄に入っていくという恐ろしい時代に、今、私たちは人の身代わりに立って、口笛を吹き、集まって、知恵を出し、大きな意思が実っていくことを願っています」。

21世紀の羅針盤・憲法九条が世界に実る、草の根の「九条の会」が無数に生まれ、大きな意思として実る創造・演奏普及活動が、07年改憲国民投票への動きが在る中で今、うたごえを広めることが切実に求められている。

〈4〉器楽の活動

埼玉アコーディオンサークル協議会は県祭典で、新作アコーディオンオーケストラ「南島讃歌」を、北海道祭典では数年ぶりに大音楽会の中でアコーディオン合同がプログラムされた。

器楽活動の分野では、JAA(日本アコーディオン協会)に集まるアコーディオンサークル、教室を主とした部門。主に国鉄のうたごえのギタリストが講習を行っている「伴奏者労働組合」の活動、大阪・京都・名古屋・長野の合唱団ピアニストが16年にわたって研修を重ねている「ピアノで歌を考える会」がある。さらに、郷土の部門での太鼓、笛、三線などの和楽器も演奏に大切な役割を果たしている。これらの部門が共に音楽を作る

パートナーとして、うたう会や合唱演奏にかかわり、創造を支える一翼を担う時、合唱発表会総評にも指摘されているように、合唱・伴奏・指揮の三位一体となった研鑽を積むことが求められている。

「2」創作活動

おきなわ祭典の成功をめざし、沖縄から世界へ平和の思いをつなぐ歌を生み出そうと、教育のうたごえ創作合宿（03年12月、15人）、日本のうたごえ創作合宿（04年2月、30人）が沖縄で開かれた。その中から、「弥勒世（みるくゆ）や給（たぼ）り」「この時代（とき）の流れの中でくいのちく」「平和の999」「美らうた」など祭典をリードする歌が生まれ、おきなわ祭典のフィナーレを飾る「平和コンサート」よみたんへとつなげた。

04年は日程上、祭典の中で「オリジナルコンサート」が行えず、合唱発表会の中で希望する団体には創作の講評を行った（39曲）が、創作講評委員を1人しか配置できず、次年度以降改善をしていきたい。

〈被爆60年、いのち輝け憲法九条『平和のうた』〉募集において、詞は短期間に87編が集まり、曲募集締め切りを前に、全国創作合宿（1月22～23日、大阪）も急遽計画。全国の創り手によって、多くの国民の要求や願いに応える、魅力あふれる歌づくりが、一層求められている。

「方針2」地域、産業別、本選とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い創造の前進をめざす合唱発表会にする

「合唱発表会」

協議会活動の柱のひとつとして位置づけ、企画の多様さ、柔軟な参加の形態も追求しながら参加団体、参加人数の増加と、未開催県での開催を追求した。全体としては、1144団体約1万3千人の参加で、前年に比べ前進した。

和歌山で開催された「関西うた新まつり」を「和歌山のうたごえ交流会」として位置づけ、全国合唱発表会参加につなげた。一気に10団体増となった福岡は、02年日本のうたごえ祭典^③福岡後の運動の広がりを反映し、県内の持ち回り開催で開催地に広げることが特徴。九州や北陸でのブロックとしての開催は、独自開催が困難な県からの参加を保証するうえでも重要な役割を果たしている。

産業別合唱発表会・交流会は協議会のあるすべての産業で開催することができた。厳しい労働条件や退職者の増加などでサークル運営も困難な中でも、働く現場に根を張って歌いつづけている姿は参加者の心を大きく勇気づけている。

合唱発表会を「コンクールの予選」にとどめず、講習会を組んだり、おきなわ祭典の合同練習会と組み合わせることも盛んになり、交流し、学び、

参加する場としても発展してきている。全国合唱発表会は、134団体の参加で、歌い手も、聴き手もよく集中した発表会となった。おきなわ祭典参加の特別編成の団体がいくつか出場したことも特徴。部門わけ、モニター用紙の活用、運営面での課題の克服などさらに改善を追求したい。

「方針3」 地方祭典の全県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ

「1」 04年日本のうたごえ祭典 〓 おきなわ

祭典は「基地のない平和な沖縄を」を合い言葉に沖縄で開かれた。大音楽会（いちやりばちよーでー）4500人、（アジアの風フェスティバル）1600人、音楽会（命どう宝）1700人、（平和コンサート 〓 よみたん）700人、（ピアもあしび）350人、（合唱発表会）3500人、のべ人13000人の参加者で、全国の連帯で成功させることができた。祭典は、沖縄の音楽文化と、沖縄・全国のうたごえが会場一つに歌いかわした（いちやりばちよーでー）、アジアのすぐれたアーティストの共演を通じて平和への思いを発信した（アジアの風フェスティバル）、うたごえの創造面で一つの到達点といえる演奏と沖縄の伝統芸能、演奏会形式による歌劇「沖縄」（小編成伴奏による演奏会形式）の初演で聴衆を魅了した（命どう宝）、時を惜しんで夜更けまで歌い踊り交した沖縄ならではの（ピアもあしびコンサート・うたう会）、平和と文化の村づくりを進める読谷村の豊かな郷土のうたと踊りにふれ、憲法九条の心を高らかに歌い上げた（平和コンサート 〓 よみたん）。それぞれ特徴ある5つのコンサートがオプショナルツアーも含め、沖縄の自然、文化、歴史を学び、体験することと相まって、魅力的な演奏と聴衆に支えられて祭典を作り上げた。

祭典成功の要因は、実行委員会総括で出されるが、①開催地の力が小さく全国とのつながりが少ない中で、長野から引き継いだ祭典への全国の連帯をさらに前進させ、沖縄への思いを開催地沖縄のがんばりにつなげ、うたごえの芽を育て、起こしたことで、長野から引き継いだ祭典への全国の連帯の基本活動をすすめ、歌づくり、組織づくりに実らせたこと。③祭典のとりくみの中で財産を残そうとサークルづくり、うたごえ協議会づくりの目標を持ってとりくんだこと。これらが運動を広げ、沖縄のうたごえ運動の再出発の方向を出した。

「2」 地方祭典と産業別祭典

地方祭典は、北海道（9月・登別、室蘭）、九州（10月・宮崎）、福岡（9月）、長崎（9月）、信濃（10月、長野）、埼玉（10月）、山形（1月）、東京・足立（11月）で行われた。

九州祭典は、02年日本のうたごえ祭典（福岡）成功を力に九州ブロックの演奏・連帯活動で実働10人弱の宮崎センター合唱団を応援して開催。

母親大会でのうたごえ分科会をステップに250人による合唱構成「平和の旅へ」、宮崎での市民合唱団への広がりなど宮崎のうたごえの展望を作った。

福岡祭典は、祭典に向けて指揮者守屋博之氏を迎え、140人での九州合唱講習会を開催。祭典では客演指揮守屋博之による「日本国憲法 あたらしい憲法のはなし」、森田ヤエ子さん追悼の「花をおくろう」他を演奏、02年日本のうたごえ祭典の成果を着実に広げている。

北海道祭典は地域持ち回りで毎年開催。今回は鉄鋼の町・室蘭の歌「俺は労働者だ」、アイヌの文化を伝える「銀のしずく金のしずく」など地域色をいかし、同時に地域に根ざした合唱組曲「襟裳の森の物語」の大合唱の成功が、おきなわ祭典参加へとつなげた。

長崎祭典は長崎のうたごえ創立記念音楽会としてとりくまれ、結成当時のメンバーも舞台上がり、50年の歴史を確認し合う音楽会となった。埼玉祭典は3年ぶりに開催。憲法・平和を柱として、合唱、プロ・アマチュア、地元の秩父事件を題材にしたアコーディオンと合唱による「秩父三抄」から沖繩、闘いの歌と総合的にプログラム。はなコリア、埼玉朝鮮女性同盟コーラスとの「赤とんぼ」アリアン」など憲法の心「共に生きる町」伝える祭典となった。

信濃祭典は例年の合唱発表会に加え、03日本のうたごえ祭典の広がりをつないで、おきなわ祭典とも連動する企画で大音楽会を開催。

山形祭典、毎年開催で04年はピアノを会場の中心に据えた「みんなでつくるうた歌UITAのひろば」は民舞やフォークダンスの参加もあり、おきなわ祭典と連動する内容となった。

足立祭典は、東京足立区の祭典として毎年開催し23回目。24団体とゲストが出演。演奏曲収録の創作曲集も発行された。

産業別うたごえ祭典は、保母（5月・福島）、港湾（7月・愛知）、国鉄（8月・東京）、医療（9月・京都）、郵便（10月・愛知）、私鉄（10月・大阪）、電通（10月・京都）、交流会として教育（7月・千葉）、自治体（9月・滋賀）と協議会のあるすべての産業別で開催された。

N T Tをはじめ大企業の「リストラ・大『合理化』」、「行政改革」のもと、公立保育所の民間委託化など官民を問わず、労働条件、人間らしく生き・働く権利が奪われている。その中で、祭典・交流会を機に、歌を通して職場の中に地域に、その実態を伝え、現実を変えていく力にと開かれ、そのベースに平和・憲法九条をととりくまれた。

保育、郵便など、民営化への動きは、その実態が伝われば、止められる、と福島での保母祭典は、統廃合・民営化への実状を合唱と寸劇による「金しだい保育園」を上演。保育所共同のサークル「あいづ さ まざらんしょ」など4サークルが生まれた。郵便祭典は、「深夜勤」等の状況を合唱構成「灯をともせ」で示した。不当労働を42人が東京地裁に集団訴訟。祭典を機にOB、退職者、地域からの入団があった。

医療祭典は、京都のうたごえ「わたしの平和」と連動して、詩吟での「憲法九条」など憲法を柱に企画構成。患者さんと病院友の会の活動が特徴だが、祭典では150人による「シルバーの青春」も歌われた。

リストラ攻撃を跳ね返す闘いを伝えた港湾、私鉄、電通は構成劇で実態を上演。港湾祭典は不夜城となった港の実態と港を戦争のために使わせないと合唱構成「動かすのは俺たちⅢく眠らぬ港で」を。私鉄祭典は過密労働でミスをした運転手を乗務から外そうとする会社に対し労働者が団結して守った実話を合唱構成「仲間ってすばらしい」を。電通祭典は11万人リストラの実態を江戸時代に置き換えた合唱構成劇で表した。

国鉄祭典は現代の大リストラ・合理化の始まり国鉄分割・民営化から18年。創立50年記念として時々の闘いと歌を構成し、ILO勧告の実行

を労働者全体の問題として伝えた。青年7人による「闘う青年合唱団」のステージは国鉄の闘いと歌が引き継がれていることを伝えた。交流会として自治体はサークルおこしも意図して、教育は館山の戦争遺跡を現代に伝える組曲「ウミホテルくコスモブルーは平和の色」を地元の戦跡と文化を伝えるNPO法人、市民合唱団と連携し館山で歌われていく足がかりとなった。

「方針4」歌の広がりをつたごえ新聞につなぎ、豊かな「うたごえ発ジャーナル」を確立する

「うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」」

うたごえ運動の血液であり、同時に運動を広くアピールするうたごえ発ジャーナルとして、各地の活動紹介と共に、年間を通して憲法を様々な角度から照らす企画を特集。識者の提言から学ぶ企画として、笠木透、池澤夏樹、小森陽一、伊藤千尋氏らへのインタビュー、日本ペンクラブの活動、元レバノン大使天木直人氏ら。また、思想統制の危機から「日の丸・君が代」強制問題の特集。沖縄の芸能・文化の紹介、沖縄戦基地問題と紙面からおきなわ祭典成功へと発信した。

「読み・作り（通信・企画提案）・広げる（読者拡大）」はひきつづき強調した。

「作り」では会員執筆による新企画「舞台スタッフ考」を開始。総合的に聴き手に届ける・表現として期待も高い。青年企画はひきつづき重視した。運動内での批評活動を高めたい、と自由闊達に意見を披瀝する覆面座談会「岡目八目 演奏批評座談会」を行った。覆面に対する賛否はあったが、批評活動を深める企画はさらに追求したい。

「読む」活動は、「広げる」活動とあわせて、関西うたごえ新まつり（交流会）が和歌山で行われ、沖縄、神奈川、埼玉で読者会、うた新フォーラムが開催された。新聞から運動の情報、活動のヒントを読みとる「読む」活動を活発にするために、企画提案・PR活動にもとりくむ首都圏のうたごえ新聞フォーラムスタッフ、京都の「れんこん倶楽部」の活動を広げたい。つながりあそび・うた研究所の二本松はじめさんの新聞紙上での発言「自分の活動にもうたごえ新聞は欠かせない。合唱団の練習時間の一部で新聞の記事からみんなで論議することが、いかに演奏を豊かにするかとと思う」に再度、耳を傾けたい。

「広げる」では、こうして生まれたうたごえ発の財産を広げること、また、情勢に照らして、05年4月の創刊50周年を前に1000人の新読者を迎えようと3次の拡大月間を設定してとりくんだ。そのなかで沖縄が祭典準備とあわせて基数の倍加を、関西うたごえ新まつりで一挙に13人、京都ひまわり合唱団友会の故郷めぐりで20人の新読者を迎えたのははじめ、大阪のうたごえ協議会議長の松島正行さん、千葉のうたごえ協議会議事務局長の埜治子さんの「歌を広げ、出会った人には新聞でつながりを太くする」活動をリードする実践があった。

創刊50周年4月までの目標達成をめざし、1月より3カ月間、拡大本部体制を強化し、運動の最重点としてとりくむ体制を確立。「読み・作り・広げる」活動が運動の創造・組織活動の両面からも急がれている。

週刊のうたごえ新聞とあわせて、季刊「日本のうたごえ」は全会員購読を目標にとりくんだが、微増に留まっている。連載新企画など誌面作りが工夫されてきている。うたごえ新聞と同じく、運動の質を高める上で、読み、話題にしていくなことを気風にしていくな必要がある。

「方針5」うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる

「事業出版と普及活動」

全国協議会や祭典実行委員会として出版普及した平和歌集「STOP THE WAR」、「メーデー歌集」、祭典歌集「うた・うた・うた2004」はそれぞれ、選曲の段階からできるだけ多くの意見をくみ上げながら制作した。平和歌集は、全国の平和を求める行動の中で大いに活用された。東京・にんたま合唱部の歌って広げる活動の中での1300冊普及は大いに評価したい。一方、メーデー歌集の普及は昨年を下回った。働く者の中へうたごえを意識的に持ち込む活動、その中で春闘、メーデーそのものを活気に満ちたものにしていくとくみを強めたい。祭典歌集は歌って参加するとりくみの中で活用され祭典参加運動の大きな力となった。「憲法大好きキャンペーン」は、きたがわてつの出演だけで100回を超え、多くのうたう会・合唱団と一緒にコンサートをつくり「日本国憲法前文」CD等も普及された。日本母親大会50回を記念して制作された「わたしたちの平和のうた」CDブックは著名な女性の方々のエッセイも好評で、他団体との協力で出版・普及の新しい教訓を得た。

音楽センター出版物ではここ数年子ども、保育、教育、手話などの出版が主力になり、講習会・カレッジなどが成功している。各地の運動と一体となつたとりくみは今後に大きな可能性を持っている。

加盟団体の事業部確立と日常活動のとりくみは引き続きの課題である。そのためにも「みんなできるとりくめる事業物」の出版は大切で、全国からの「出版してほしい企画」の提案を寄せ合いたい。各合唱団などの自主出版（CD、ビデオ、歌集など）が盛んになってきている中で音楽著作権を尊重するとりくみはひきつづき大切である。

「方針6」歌う喜びを大切に、音楽の輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を発展させる教育・学習活動をすすめ、21世紀をになうリーダーづくりを計画的にすすめる

「教育・学習活動」

合唱講習会は東西それぞれ150人を上回る参加者で成功した。年々参加数が増え高まりを見せている要因としては、開催地で早くから話し合いを進め、内容を作り上げていることが大きい。西日本の講習会では講演「憲法どうなる、どうする」を企画し、参加者に深い感銘を与えた。音楽と時代との関わりを深める上で教訓的である。作品の特徴と音楽的な手法を明確にした合唱づくりで、歌い手の意志を引き出し、感動的であった。東日本の講習会では合唱表現をいろいろな角度から迫り、ボディーパーカッション、アカペラ講座、など基礎的な力をつける意味でも有意義であった。東西の講習会におきなわ祭典の全国合同曲をとり上げ、祭典の音楽的内容を深めた。

教育講習会は15都道府県67人の参加で行われた。コース別指揮講座、ボイストレーナー研究、合唱、声楽個人講座、指揮法特別講座、合唱特別講座などが密度濃く行われ、充実した講習会となった。作品の理解、事前の準備、基本の大切さ、演奏としての意識など示唆に富んだ内容であった。教育講習会は受講者の継続的な参加がもつとも大切である。歌い手としての参加も日常の練習で行われる指導者との共同作業において積極的な意識を生み出す。指揮者として歌い手としてだれもが参加でき、その相互の生きた反応がもつとも重要な学ぶ場であることをあらためて痛感した講習会であった。

指揮者・合唱指導者会議を教育講習会時に開催したが準備不足もあり、さらに呼びかけて、「あり方」を深めていくことにした。当面、登録活動を進めるが運営体制も含め今後の課題である。

04年日本のうたごえ合唱団が前年に引き続き約80人で結成され、おきなわ祭典での出演、歌劇「沖繩」演奏の中心的役割など活動が展開され、運動の創造的前進の一つを示すと共に参加団員相互の交流と体験が各地での演奏創造の刺激となり、その存在は大きい。05年度合唱団の募集も行われ、活動が開始されている。

北海道、九州などの合唱講習会も祭典合同曲をとり上げ、地元の参加も成功し充実した内容で行われた。さらに運動全体を視野に入れた参加交流が期待される。その他、新しい音楽家とのつながりを含め学習活動として学ぶところが大きい関西合唱団の日曜講座、各県・ブロックでのうたごえ交流会、学校、研究会なども工夫がされて行われている。これらと合わせ、協議会として計画を持った21世紀を担うリーダーづくりが急がれる。

「方針7」青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、21世紀を担う青年をたくさん迎える

「次代を担う青年の活動」

イラク戦争反対、人質解放のとりくみ、核兵器廃絶のとりくみの中でうたごえをひびかせる青年の姿が広がった。うたごえの仲間内にとどまらず、労働組合青年部、平和団体の青年、青年運動をすすめる団体、文化団体、市民団体とも共同が広がり、さまざまな連帯活動がうまれている。関東、東海、関西ではブロックとしての活動も盛んになり、関東と関西では青年交流会も開催、九州、長野でもひきつづき活動が継続され、新たに北海道でも青年独自のとりくみが行われた。これらがおきなわ祭典青年ステージを成功させるとりくみに結びつき、事前の訪沖が繰り返し行われ、10月

には指揮者、伴奏者も含み大挙して沖縄を訪れ合同練習会が開催された。関東では、一人でも多くの青年と沖縄へ行こうと、青年合同曲を普及しながらカンパ活動にとりくみ、高校生、学生が参加しやすい状況をつくった。青年はいつまでも青年ではいられない。さらに若い世代とつながるとりくみが展開され始めた。にんたま合唱部では、大学の新歓をとりくみ、チラシやポスターをつくり、歌って訴えた。また「関東うたごえと青年のかげはし会議」も開催され、関東全域を視野に入れ、大人も一緒に青年対策を考える場として動き出している。

青年学生部をさらに充実させ、情報の交換と意思の疎通を図る必要がある。全国の青年が一堂に会し交流できる機会は大切。また、運動論や音楽の基礎、うたう会・うたごえ喫茶リーダー講習などを系統的にすすめる「うたごえカレッジ」など協議会として開催し、次代の担い手を育てる具体的なとりくみは急務である。

「方針8」うたを創り、歌い広げる中で、サークル・合唱団を建設し、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするためブロック連絡会づくりを強める

「団員拡大、サークル建設、協議会確立と加盟団体を増やす」

うたごえ運動の持つ力をあらためて確信する中でサークル・合唱団の仲間が増え、協議会に加盟する団体も増えている。沖縄では祭典準備の中で「うたごえサークルゆうな」が結成され協議会に加盟、祭典後に「三線グループ」が協議会に加盟し、3団体で沖縄のうたごえ協議会の結成が準備されている。過去に、日本のうたごえ祭典を成功させた福岡や長野でその後の活動の中で協議会加盟団体が増え、東京や大阪での加盟団体増は、協議会としてのとりくみが活性化し、連帯活動の前進と、この情勢の中で協議会に集中して運動をすすめることの意義を明確にした意識的な働きかけがあつてのことといえる。ブロックの連帯活動で和歌山からの協議会加盟を実現した関西、宮崎での県祭典で九州7県すべてで開催できた九州、各県持ち回りで毎年開交流会を開催してきた東北、関東など、ブロックとしてのとりくみも前進している。

また、「紫金草全国ネットワーク」の団体からの新加盟も続いている。全国ネットワークの方針にうたごえ協議会に結集し運動をすすめることが明確にされ、地域の中での連帯活動も活発に行われてきた成果といえる。京都では和太鼓サークルが協議会の中で大きな役割を果たしている。実践的などりくみの中で和太鼓サークル、バンドのグループなども視野に入れた協議会づくりをすすめたい。

一方、その地域や産業別で活躍して合唱発表会には参加はするが、協議会には結集できない団体も依然として少なくない。様々な要因を取り除く協議会からの丁寧な対応が必要とされている。また、県に加盟団体が1団体というところや、協議会は存在するが実質的な体制が確立されていない県もある。未加盟県の克服とあわせて、協議会建設をブロックの連帯も通して計画を持つてすすめたい。

「方針9」世界の音楽家、音楽団体との国際交流を広げる

「国際交流」

①アジアの風フェスティバルと韓国との交流　ここ数年掲げてきた「4つの風」の運動のひとつ「アジアの風」のとりくみとして03年からすすめてきた「民衆の交流と連帯」アジアの風フェスティバル―日本・韓国・中国・ベトナム―は沖縄と東京の2公演が実現した。小室等、池辺晋一郎両氏がコーディネーター・司会進行によるコンサートは、普天間かおり、キムウオンジュン、シュイクウ、ビーク・ホーンの4氏の素晴らしい演奏と、アジアの風合唱団（約150人）と共演する「さとうきび畑」「ねがい」（編曲小室等）の演奏は参加者に大きな感動を与えた。このとりくみが、日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会、東京労音、日本のうたごえ3者の代表で構成されたプロジェクトですすめられ、今後の国際連帯運動、文化運動の共同のとりくみの新たな展望を切り開いた。このプロジェクトを継続させていくことが確認されている。

光州で開催された「2004年アジア民衆文化パレード」に姫路労音に日本のうたごえからも加わった代表団が参加した。光州事件25周年の05年5・18光州アジアフェスティバルに大勢の代表派遣の要請があった。韓国民族音楽人協会の紹介で、WCO2004（ワールドカルチャーオーブ）に日本のうたごえが特別招待された。きたがわてつ、田楽座、青年グループ13人が訪韓、7000人の聴衆が集まった野外ステージで「ヒロシマの有る国で」他を演奏した。青年グループには青年団体や労働組合青年部の専従者も加わり、ここでも共同のとりくみがひろがった。韓国は05年解放60周年を迎える。8月15日を中心に年間を通してさまざまなとりくみが計画されている。

②世界に発信する平和のうたごえ

全国紫金草ネットワークは111人で第4次の中国公演、中国の合唱協会と550人の大合唱も実現。三浦綾子作品による構成「石ころのうた」をゼヒスイスで歌って欲しいとのよびかけに応えスイス公演が実現。神戸市役所センター合唱団は東京、福井、大分からの参加も得て第3次ニュージールランド公演。非核の国ニュージールランドで「悪魔の飽食」「沖繩の雲へ」を池辺晋一郎氏の指揮で演奏。

「方針10」和太鼓と民謡・民舞のネットワーク化とシステム化を促進する

「郷土のうたと踊り」

03年日本のうたごえ祭典がながので全国郷土合同として発表した「山のお囃子」（田楽座作曲）を04年おきなわ祭典でもとりくみ、田楽座山

本朗生氏ほか全国から10団体44人が参加し、和太鼓演奏を沖縄の地で成功させることができた。東・西日本それぞれで開かれた「郷土のうたと踊り講習会」（東／200人 西60人）では、おきなわ祭典での合同演目「エイサー」を統一専科として取り上げたほか西では三線コース、田楽座山本朗生、鼓童堀つばさ両氏のセッションが大好評。東では地元七尾から豊年太鼓の保存会、縮太鼓、しの笛コースなど充実した講習会となった。現在、うたごえ運動における今日的な郷土活動の課題の追求と今後の方向として次のことが考えられる。①専門家との協力共同。②全国講習会の充実。③郷土センターの設立。④情報・教育者・楽譜整理・記録・創作等々の体系化。⑤郷土教育者の組織化、メニュー化。⑥和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン。⑦まちおこし、まちづくりプランとしての位置づけ。

2004年日本のうたごえ祭典「おきなわ

2004年日本のうたごえ祭典「おきなわ実行委員会

総括

I はじめに

“基地のない平和な沖縄を”を合い言葉に“2004年日本のうたごえ祭典「おきなわ」（以下、おきなわ祭典）は、11月20～23日、沖縄コンベンションセンターを主会場に、大音楽会をはじめ5つの音楽会にのべ13000人が集い、全国の連帯で成功させることができた。

5つの音楽会は、沖縄の音楽文化と、沖縄・全国のうたごえが会場が一つになり歌いかわした大音楽会（いちやりばちよー）4500人。アジアのすぐれたアーティストとの共演を通して平和への思いを発信した（アジアの風フェスティバル）1600人。うたごえの創造面での到達点といえる演奏と沖縄の伝統芸能、演奏会形式による歌劇「沖縄」の沖縄初演で聴衆を魅了した「命どう宝」1700人。平和と文化の村づくりをすすめる読谷村の豊かな郷土のうたと踊りにふれ、憲法九条の心を高らかに歌い上げた（平和コンサート「よみたん」）700人。夜が更けるのを惜しんで歌い踊りかわした沖縄ならではの（ピアノもあしびコンサート・うたう会）350人。それらがオプショナルツアーも含め、沖縄の自然、文化、歴史を学び、体験することと相まって、魅力的な演奏と聴衆に支えられて祭典をつくりあげた。

日本のうたごえ祭典の沖縄開催は、うたごえ運動の念願であった。戦後27年間、沖縄が米軍占領下にある中で、沖縄の祖国復帰闘争（日本への施政権返還）に、日本のうたごえは、「沖縄を返せ」はじめ、たくさんのお歌を創り、また、日本のうたごえ合唱団を数次にわたって沖縄に派遣し、沖縄にうたごえを広める活動を通じて闘いを支援してきた歴史があった。

そして、今日においても沖縄は依然として基地の島であり、沖縄問題は日本の主権と平和に深く関連している。米占領下で沖縄返還運動を歌で励ましてきた沖縄のうたごえの歴史を今に伝えるとともに、復帰以後、一時弱まった沖縄のうたごえの活性化を重視して、沖縄開催は計画された。沖縄に新たにうたごえを起こし、財産を残そうとする思いと、全国の熱い連帯の中で、困難を克服して祭典は大きく成功させることができた。沖縄のうたごえの歴史の新たな契機をつくったこの祭典の成功をご支援頂いた地元、全国のみなさんに心から感謝し、ともに喜び合いたい。

日とりくみの経過〜03年まで

2000年12月、全国協議会より、沖縄・南ぬ風合唱団に、04年日本のうたごえ祭典開催の要請を受け、02年3月3日、祭典に向けての懇談会「うたごえ運動と日本のうたごえ祭典の学習と交流」を行った。そこで出された「沖縄のうたごえの力は小さいが、沖縄でも祭典ができればいいな」という声を大切に準備を始めた。

02年4月、「どんな祭典にしたいか」という想いを交流することを中心に第1回おきなわ祭典準備会開催。7月、第2回準備会で会場の仮り押さえ、日程案の検討に入った。11月、第3回準備会で、よびかけ人組織開始。03年2月の第4回、4月の第5回準備会でよびかけ人を確認し、第1回実行委員会へと進めた。

おきなわ祭典実行委員会結成総会は7月6日、祭典賛同よびかけ人11人含め39人の参加で開かれた。

賛同呼びかけ人の中村文子さん（沖縄戦記録フィルム1フェイト運動の会事務局長）は、「口ずさむ歌は、今は調子はずれだが、少女の頃から歌った『ていんさぬぐ花』や宮良長包の歌（『えんどうの花』等）が心に残っており、いまだに蘇る。ゴーヤをきざみ、洗濯物を干しながら心をなごませるような歌や平和の歌が歌われる祭典が楽しみ」とあいさつ。太田昭臣さん（沖縄子育てネットワーク代表・元琉大教授）は、「昨春秋、福岡へ行った時、2002年日本のうたごえ祭典『福岡のとりくみで『平和の旅へ』を聴き、うたごえのすばらしさ、その一端を知った。おきなわ祭典成功への力になりたい』等たくさんの励ましと決意が述べられた。

実行委員会参加者からも、「祭典を開くと聞いて驚いた。数千人を集めることは大変なことだが、もしやれたらすごいことだ。祭典をやる意義をみんなで確認し、成功させていこう、OBの一人としてがんばりたい」をはじめ、一人ひとりに広げながら祭典を成功させようという決意が述べられた。

おきなわ祭典の基調、開催方針、要領、体制が以下のように決められた。

〈おきなわ祭典の基調〉

- いのち輝く平和な世紀をめざし、人間らしく生きる喜び、明日への希望を多くの人々とともに、歌い上げる
- 基地をなくし、戦争に反対し、平和を守り、命の尊さをうたう
- 深刻な不況のもとで、職場や暮らしの中から湧き上がる要求や願いをもとに、つくり、うたい、要求実現と合わせてうたごえを広める

○沖縄の歴史、豊かな文化を学びながら、その交流を深め、音楽専門家、愛好家、各界・各層の協力を得て、沖縄ならではの祭典をつくる
○祭典のとりくみの中で、新たな職場、地域にうたう会、サークルづくりを進める
また、当面の活動として以下を確認した。

- ①、呼びかけ人を100人へ。
- ②、特別賛同金、一般賛同金を広範囲の人々にお願ひする。
- ③、歌って広げ地域に祭典の事を広げる。
- ④、祭典の基調にもとづいた企画案を持つ。
- ⑤、県内のうたごえ運動の歴史の中で培われた力を引き出し、積極的な参加を呼びかける

実行委員会の立ち上げ後、運営委員会を中心とした活動を定期的に開催し、7～8月には祭典参加の要請行動、名護みんうたう会、豊見城みんうたう会開催。9月に事務所開設。10月には“うたごえ新聞フォーラム”を開催し、うたごえ新聞読者を広げ、祭典内容を伝えることを確認。11月、“2003年日本のうたごえ祭典”でおきなわ祭典第一次チラシ配布、大横断幕で宣伝。12月、第3回実行委員会であかつきの大合唱成功の意思統一とプレ企画を検討。

2004年2月15日、全国協議会総会にひきつづき、おきなわ祭典第1回全国実行委員会を開催。全国的視野でおきなわ祭典の内容の検討が行われ、開催方針・開催要領、企画方針、組織・宣伝方針、財政・事業方針、体制を再確認した。

Ⅲとりくみの展開～04年開けから

(1) うたって広げる活動 04年のスタートを切って数年ぶりに新年の「あかつきの大合唱」がとりくまれた。会場の那覇空港近くの瀬長島には70人余が集い、歌い交わしながら祭典成功を誓い合った。1月31日、日本平和大会の文化行事に、ピースウエーブ合唱団として出演し、おきなわ祭典をアピール。その演奏が、うたごえサークル「ゆうな」結成のきっかけとなった。3月20日、祭典プレ企画「春をうたう音楽会」(250人の参加)を那覇・教育福祉会館で開催。このプレ企画にむけて祭典チラシ・チケットを発行し、宣伝・組織で実行委員会が本格的なとりくみの始まりとなった。音楽会の内容も、三線・琉球舞踊、合唱、児童の太鼓演奏など沖縄の文化芸能を盛り込んだバラエティーに富んだものとなった。このとりくみを通して、音楽専門家・芸能家・他の合唱文化団体との交流・提携が深められ、うたごえの輪を広げる契機をつくった。

7月19日、浦添市社会福祉協議会ホールでの「大みんなでうたう会」は150人の参加でうたう会としては画期的なものとなった。こういう催しには初めて参加したという人も少なくなく、歌いたいという要求、うたごえの確実な広がりを確認する場となった。9月12日、浦添市中央公民館で祭典出場者の予行練習も兼ねた「かりゆしうたごえ交流会」には200人余が参加。和やかに行われたうたごえ交流を通して出演者全員で祭典成功へと決意を固める場となった。13日、那覇市内・パレット久茂地前「街角ライブ」で、うたごえ・パントマイムを行い、祭典の宣伝を行い広

く市民に訴えた。

全国からの「祭典成功うたごえひろめ隊（以下、ひろめ隊）」として、国鉄のうたごえ、青年のうたごえが来沖して各地で演奏活動を行った。9月11～13日の3日間ではあったが、国鉄のうたごえの7人は中部協同病院での「愛と平和のコンサート」、新基地反対で闘っている辺野古の座り込み現場での演奏、かりゆしうたごえ交流会、街角ライブなど精力的に演奏し、すばらしいうたごえを響かせた。10月23～24日、東京・関東中心に青年のうたごえが17人で、合同練習と合わせ、辺野古の座り込み支援、地元青年との交流を深め励ました。その他、豊見城の平和の夕べ、「うたごえフェスティバル」等で「うたごえを広める」活動が展開され、沖繩協同病院でのうたごえ会、保育園でのうたごえ会が持たれた。こうした活動を通してうたごえの輪を広げ、うたごえの素晴らしさを伝え、祭典成功への機運を高めていった。

(2) 宣伝について 祭典宣伝の主力となった祭典チラシは、仮チラシ2万枚（地元8千、全国1万2千）、本チラシ5万枚（地元3万5千、全国1万5千）を印刷して、地元では新聞折込3回、街頭・各種集会での配布をおこなった。ポスターを作製しなかったことから、チラシをA3カラーコピーに拡大して県内の公共掲示板に貼布。また、マスコミへのアプローチより、テレビ・ラジオ番組で取り上げられ、新聞への投稿など行った。開催直前の宣伝カーによる音出し宣伝も一定の効果あげた。

祭典ニュースでのつたえる活動を重視し、発行回数を増やす努力もしたが、事務局体制の弱さもあり、充分できなかった。

(3) 企画につながる出演者組織 地元沖繩は、大音楽会の「かりゆし・ゆいまーる」の各分野のうたごえ、ピースウェーブ合唱団（男声、女声、青年合同、ロックソーランなど）を中心にする。これらの出演者組織は、多くの人たちが舞台で歌ってもらうことと合わせ、チケット普及や、祭典後に分野ごとに財産としてうたごえサークルを残し、沖繩のうたごえを拡大する上で重視した。

教育の分野は幾度も対象者にあたるなど努力したが、教職員の現状の厳しさの中で組織の広がりを作れなかった。医療では、医療生協などの組織的な協力もあり、沖繩協同病院に祭典成功めざしての「うたごえ会」が計画され、何回かのうたごえ会が持たれた。保育は「ドンドコ ドンマイ」を歌い踊る講習会を講師に二本松はじめさんを2回呼び、祭典参加につなげた。ロックソーランは、早くから東京から講師を招いて、講習会を2回開き、各学校や保育園、子ども会等でとりくまれ、55人の当日参加を得た。親子の「ぞうれっしゃがやってきた」は、これまでの地元での公演を練習会に地道につなげ、150人近い参加を得た。青年は、ゼロから出発し、1人、2人と練習会を積み重ね、全国青年に励まされながら、8人まで広げた。高齢者は、浦添、末吉、小禄3地域のシルバークラスが早くから祭典参加を決め、全体を励まし、70人を超える参加となった。ピースウェーブ合唱団は、南ぬ風合唱団と「ゆうな」を中心に一定の広がりを見せた。

また、音楽会「命どう宝」では、山田健とうたごえ合唱団、「悪魔の飽食」合唱団のとりくみで、専門家、合唱連盟、音楽団体とのつながりを広げた。（平和コンサート「よみたん」では、「川の水よ太陽よ」を南ぬ風合唱団中心によりかけ、読谷小学校のとりくみが、全体を励まし、地域とのつながりを強め、広がりをつくった。

全国は、大音楽会では、地元沖繩が主体になる第一部音楽構成「命ぬ宝」の『アメリカ世や』『命どう宝』、「ぞうれっしゃがやってきた」「かりゆし・ゆいまーる」企画に積極的参加し、事前の練習の応援も含め、当日の演奏を支えた。また、「わたしの憲法・マイ憲法」を京都のうたごえを中心に、島の幸せを歌って踊って、叩いて、弾いてのロックソーラン、和太鼓を全国合同でとりくんだ。

全国が中心になる企画、第3部「弥勒世や」の『声をひとつに、“命どう”ボイス』で、青年、男声、女声、全国と合同をとりくんだ。この間の蓄積と祭典参加の目標を明確にし、計画的な練習を積み上げたとりくみをした女性のうたごえ、「ひろめ隊」など励まし合いながらとりくんだ青年のうたごえなどそれぞれの特徴をいかし、沖縄の参加者に大合唱の魅力を伝えた。

〈アジアの風フェスティバル〉では、東京関東中心に組織された「アジアの風合唱団」が、出演者とともに合唱で盛り上げた。

音楽会〈命どう宝〉では、ながの祭典からひきついで日本のうたごえ合唱団、沖縄、長野の2回にわたる全国縦断コンサート公演を成功させた「悪魔の飽食」を歌う合唱団、そして、本土から移動しての全国歌劇「沖縄」合唱団は、ゲネプロも含め、練習が大変な中、創造の連帯を發揮しての参加活動となった。

〈平和コンサートヨよみたん〉では、沖縄にも応援に入り、合唱朗読構成「紫金草物語」を歌った全国紫金草合唱団、創作合宿から生まれた平和のうたを歌った教育のうたごえ他が演奏を作り上げた。

沖縄という地理的に遠い条件の中、全体として全国の沖縄に心よせ、歌い手を組織し演奏をつくりあげていった連帯活動が大きな力となった。

(4) チケットの普及 大音楽会5000人目標から、地元沖縄は大音楽会に焦点を当て、よびかけ人、運営委員、実行委員、出演者等含め235人がチケットを持ち、普及に当たった。大音楽会中心のチケット普及になったため、他の音楽会の宣伝がゆきとどかなかった面もあったが、最終的に、大音楽会1300人、各音楽会含め約2000人近くが祭典に参加した。このことは今後の沖縄のうたごえ運動に大きな希望と展望を与えた。全国は、飛行機、ホテルの確保も含め、2月の全国実行委員会から祭典ツアーをよびかけた。合唱発表会参加が決まってからではなく、早くからの祭典参加運動にとりくんだ。沖縄への特別な思いも含め、「新しいサークルも含めほとんどのサークルから参加した」(長野)に見られるように、初参加を含め祭典全国参加は近年では最も多い3000人近くが沖縄の地を踏んだ。

(5) うたごえ新聞の役割と拡大 祭典を迎えるにあたって、秋、夏の2回、うたごえ新聞編集長を招き、うたごえ新聞フォーラムを開催した。紙面についての感想・意見交換の中で、うたごえ新聞の魅力、新聞が祭典を伝える上でも大きな役割を果たすことを再認識した。祭典のとりくみ状況を知らせ、広げるためにも沖縄の読者拡大の目標を先ず100人と決め、うたごえ会や出演組織をする中で徐々に広げられた。04年に52人の新読者を迎え、目標に及ばなかったが祭典成功への大きな力になった。

新聞を初めて手にする人からは、内容の豊富さ、全国の活動の様子に感銘、週刊発行に驚きの声も聞かれた。祭典までの購読という人も多く、祭典終了後大幅な減紙もあるが、運動をすすめる上で新聞が重要な役割を果たすことを再度確信し、ひきつづき、祭典の財産をつなげる力にするために読者拡大にとりくむ。

(6) 事務局、事業・財政活動 03年7月、実行委員会結成総会を機に専従体制を開始。毎週の事務局会議を中心に独自課題をすすめる、全体の進行状況を確認、調整しながらすすめた。

限られた人数での事務局活動の中で、ボランティア専従、ボランティア要員の活躍は大きな力となった。事務所は当初「バナナハウス」を拠点にし、会議や練習会場として活用させてもらった。9月より事務所を構え、全国からの応援隊の受け入れ対応も含め、事務所への結集が強まった。全

国からのひろめ隊や応援隊は事務局の励みにもなり、運動の広がりをつくる上で大きな役割を果たした。が、地元事務局サポートの大きな広がりをつくりきれなかったのは反省点である。

祭典財政は、賛同金、チケットの普及を中心に、祭典歌集などの出版事業、祭典ツアー財政、広告、当日の物販等で組まれた。祭典チケットの財政目標未達成を賛同金、出版事業、広告、物販、祭典ツアーの目標超過達成で補い、黒字で終え、沖縄のうたごえに財産を残すことができた。

賛同金は、全国の超過達成により全体の目標を超過達成した。地元は2000口という大きな目標に対し、達成1526口となったが、沖縄でこれだけの人数の賛同金(者)を得たことは大きな成果といえる。

チケットは、大音楽会、音楽会(命どう宝)の財政目標未達成もあり、全体として目標までいかなかった。

事業活動は、祭典歌集、メーデー歌集、平和歌集「STOP THE WAR」をはじめ、音楽センター出版物を主としてとりくみ、うたう会、二本松はじめ講習会などで普及した。プログラム広告は、細かく大胆に呼びかけ、目標を突破した。ぎりぎりですら決めた「記念ボトル」販売は大好評となり、予期せぬ財政確保となった。祭典バザールは、沖縄の特色を生かしたお土産品で全国のみなさんに大好評だった。

(7) 財産づくり 祭典開催の大きな目的の一つである財産作り、サークル建設では、うたごえ活動家の目的意識的働きかけもあって、5月にうたごえサークル「ゆうな」が誕生、全国協議会加盟は大きな成果であった。また、三線グループもつくられ全国協議会加盟も確認された。祭典終了後すぐ、うたごえ祭典の感動をうけて、南部地域に新たなうたごえサークル・島尻うたう会がつくられた。

祭典を通じて生まれた音楽専門家とのつながりは、今後の活動を推進していく上で大きな力となるものである。南ぬ風合唱団、うたごえサークル「ゆうな」と三線グループの3組織を中心に2月の全国協議会総会めざし、沖縄のうたごえ協議会の結成の準備がすすめられている。財産を残そうという方針は着実に実を結ぼうとしている。

(8) 当日体制 大音楽会(へいちやりばちよーでー)の当日体制は、地元にとって、他の音楽会に比較して、要員確保が大変だったが、実行委員団、祭典準備でつながった団体への協力も得て、無事終了できた。

ダルク(薬物依存リハビリセンター)の人たちの3日間にわたる特別要員の活躍や会場前歓迎のエイサーの演奏等祭典を主体的に支えた活動にあらためて感謝したい。また、音楽会が多く運営が大変な中で、これまでの経験を生かした全国運営委員、経験のない中で奮闘した地元運営委員のみなさんの力で全体の祭典が無事終了したことを喜び合いたい。

IV 企画総括

大音楽会(へいちやりばちよーでー)(沖縄コンベンションセンター展示棟)「涙!涙!涙だった、誘ってくれてありがとう!」「命薬(ぬちぐすい)だった!」「うたごえっていいね、元気もらった!」とうたごえ祭典を初めて経験する地元沖縄の声。「歌い手と聴衆が一体となったあつた

かい祭典」「うたごえ祭典のすばらしさをあらためて知った」と近年では初参加も最も多かった全国からの参加者の声。

うたと踊り、三線と太鼓の響きのなか、沖縄の音楽文化と沖縄、全国のうたごえが会場が一つになり平和な21世紀をと歌いかわした。オープニングの沖縄伝統芸能の豊かさと奥の深い演奏に圧倒された野村流伝統音楽協会の「渡りぞう・龍落菅攪」、四ツ竹踊りから、第一部〈命どう宝〉、第二部〈ニライカナイ（理想郷）の夢を抱いて〉、第三部〈弥勒世や（平和な世へ）へと歌い、踊り、叩き、弾く演奏、そして、ファイナーレの力チャーシーの総踊り等沖縄の伝統音楽文化の土台の上にうたごえの良さが輝いた演奏で、舞台と客席が一体となって集中した音楽会となった。

〈アジアの風フェスティバル〉（沖縄コンベンションセンター劇場棟）。ベトナム、中国、韓国、そして、日本から4人のアジアのすぐれたアーティストの競演を通じて平和への思いを発信したコンサートとなった。作曲家池辺晋一郎さんの時には洒落の入るコーディネートで最後のアジアの風合唱団、出演者によるファイナーレは、熱く燃え、沖縄、アジア、世界へ平和のうたごえを響かせた。

〈命どう宝〉（沖縄コンベンションセンター劇場棟）。安富祖流絃声会の伝統芸能、日本のうたごえ合唱団、山田健とうたう合唱団、全国「悪魔の飽食」を歌う合唱団、演奏会形式による歌劇「沖縄」ハイライトの沖縄初演等、うたごえの創造面での一つの到達点といえる演奏と沖縄の伝統芸能で聴衆を魅了した音楽会となった。

〈平和コンサートニよみたん〉（鳳ホール）。「憲法で基地を解体し、平和の村づくり」を進める読谷村の鳳ホールで、“ふるさと教育”でとりくむ子どもたちの棒術、獅子舞、踊り、三線等豊かな郷土のうたと踊りにふれ、沖縄戦ガマでの悲劇を伝える歌芝居、読谷小学校6年生他による「川の水よ太陽よ」、全国平和のうたごえによる「平和の999」他、合唱朗読構成「紫金草物語」の全国合同等、九条の心を高らかに歌い上げた。

〈ピアもあしびコンサート・うたう会〉（ピアドーム）。小編成の演奏、飛び入り等、夜更けを惜しんで歌い踊りかわした沖縄ならではのコンサートうたう会となった。

4日間にわたるおきなわ祭典は、テーマ“基地のない平和な沖縄を”を各音楽会のタイトルにこめ、沖縄の心を「声をひとつに、“命どう”ボイス」と熱く歌いかわした祭典となった。その成功は、聴衆と歌い手、舞台スタッフに支えられつくりあげたが、体制が不十分のため、大音楽会の企画づくりの遅れ、参加人数の確保遅れが舞台づくりに影響を与え、当日のスタッフ体制の努力に負うところが大きかったことを反省点としたい。

V おわりに

①、2003年7月6日に実行委員会を立ち上げて以来、1年半におよぶとりくみであった。地元の組織体制の弱さを全国のうたごえのみなさん

に支えられ、祭典成功に導くことができた。また、開催地宜野湾市、読谷村の協力は祭典を成功させる大きな力になった。特に宜野湾市伊波洋一市長の挨拶をはじめ、市広報誌上での宣伝・チケット普及・賛同金募集の面での協力をいただいた。

また、祭典をとりくんでいる最中の8月13日に米軍大型ヘリが宜野湾市の沖縄国際大学学舎に墜落・爆発した事件は、宜野湾市民をはじめ県民に普天間基地撤去・辺野古への新基地反対の闘いの炎をさらに、もえあがらせた。

うたごえ祭典実行委員会と全国協議会は連名で抗議声明を発表し、沖縄県民の基地反対闘争と連帯する立場からも平和の祭典のうたごえ祭典を成功させる重要性を確認した。

全国のうたごえ仲間の熱い思いは沖縄に集中し、うたごえ祭典を成功させたことで「うたごえは平和の力」のスローガンが基地の島沖縄で確認された意義は大きい。うたごえ祭典の沖縄開催は、時宜、内容共に画期的であり、日本のうたごえ運動の歴史に確かな一ページを刻むことになったものと確信する。

②、日本のうたごえ祭典の沖縄開催は実行委員体制の弱さやうたごえの広がりが小さい状況からの出発で、その成功は未知数であったが、米占領下での沖縄のうたごえの歴史、労働組合・民主団体への協力要請行動、「うたごえが浸透していった。そうした活動はうたごえ運動の素晴らしさを確固なものとして認識させた。祭典開催とその成功は沖縄のうたごえに命を吹き込み、沖縄のうたごえ運動の再生の条件と転機をつくることになったといえる。

沖縄のうたごえ運動は再び歴史的な第一歩を踏み出した。私たちはこの祭典で得た貴重な宝・財産を実行委員会後結成準備をすすめている沖縄のうたごえ協議会にひきつぎ、発展させ、沖縄のうたごえのニライ（理想の邦）をめざしたい。

いのち輝け、平和のうた、憲法九条を世界に

うたごえ創立60周年に向かう05年

活動方針

被爆・戦後60年。日本は、戦争放棄の憲法のもと軍隊として他国の人を殺傷することなく、また、戦死者を出すことなく歩んで来た。この60年は平和憲法を礎として、戦争をしたい勢力ときびしく対峙してきた年月でもある。

日本のうたごえは、憲法改悪への流れを押し止め、「被爆・戦後60年・いのち輝け憲法九条」を「平和と暮らしまれ」の声・行動結び、ひろしまに心をよせ、平和のうたをつくり広げ、歌・音楽の感動で、人々の心をつなぐうたごえを全国津々浦々に響かせたい。

「新しい時代に生きる人々のねがいや思いを歌ったうたをつくり、多くの人とどけ、そのつながりをうたごえ新聞や協議会加盟で結び、うたご

えの組織を大きくする。そのためにも21世紀の運動を担うリーダーづくりと教育・学習運動を活発に”を基本に

◆ “憲法九条をまもり、核兵器をなくそう”の平和のうたごえを全国津々浦々で起こす。その広がり各地でうたごえ会、コンサート、うたごえ祭典等に実らせ、“いのちの輝きと平和へのねがいを歌い上げる”と開催する“日本のうたごえ祭典”ひろしま”を成功させる。

◆ うたごえ祭典と合わせ、演奏交流と普及の場であり、うたごえを広く大きくすすめていく力となる合唱発表会運動を活発にしようたごえの輪を大きく広げる。

◆ 「うたごえ新聞創刊50周年」を内外に大きくアピールし、運動の広がり結び発信する“うたごえ発ジャーナル”の役割を一層輝かせ、かつてない読者を迎える。

以上活動を重点に、うたごえ創立60周年に向かう05年方針を持つ。

方針へ1 人々のねがいと結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたごえ」を旺盛に展開し、“共に生きる町づくり・地域づくり”のうたごえを広げる。

◆ “いつでもどこでもうたごえを”を合言葉に一人・合唱・器楽・和太鼓と民謡・民舞：多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びをひろげる。

◇ すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、“みんなうたごえ”を開く。

・ 60周年までに全市町で“みんなうたごえ”の計画的を持った実践をすすめる。

・ 職場にうたごえを響かせることが厳しくなっている中で、人間らしく生き、働くために今あらためて職場に根ざしたうたごえを起こす。※みんなうたごえ”いつでもどこでもうたごえ”様々な形態、内容、場所、うたい広げる活動の総称

◆ 多くの人が“こぞって歌える”愛唱歌をつくりだす創作運動を活発にする。

・ 歌をつくり生まれた作品を歌い、その中でよりよいものをつくりあげていく“みんなで作る運動”をひろげる。

・ 「日本のうたごえ創作センター」の機能を充実させ、創作活動家を生み出し、創作活動と作品交流を進展させる。

◇ 05年は、「戦後・被爆60年、憲法と平和のうた」をつくり、うたい、ひろげることを徹底して行う。

◇ 60周年に向けた記念作品の制作と普及計画を持つ。

方針へ2 地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い創造の前進をめざす合唱発表会にする。

・ 合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせ、さらに改善を進める。

- ・参加団体を増やす目標を持ち準備を進め、全国の目標を確実に達成する。
- ◇05年は、合唱発表会参加団体今年度60団体増の目標を持ち、未開催県の今年度開催計画を持つ
- ◇60周年までに全県開催計画を持つ

方針〈3〉 地方祭典の全県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

- ◆うたごえを起こし、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、うたごえ祭典の新たな前進をめざす。
- 05年以降、08年（うたごえ創立60周年）までの案を具体化し計画を持つ。
- ◇05年は、「2005年日本のうたごえ祭典」を全国の連帯で成功させる。
- ◇地方祭典の全県開催
- ◇日本のうたごえ祭典開催計画
- 05年広島、06年福井、07年奈良（案）、08年運動60周年記念祭典東京（案）

方針〈4〉

「うたごえ新聞創刊50周年」を内外にアピールする1年として、歌の広がりをうたごえ新聞につなぎ、豊かな「うたごえ発ジャーナル」を確立する。

- ・読んで魅力を伝え、通信・提案を送り、結びつきを広げ読者になってもらう。読み、作り、広げるを合い言葉に紙面の中からたくさんさんの運動の財産を学び、創造・組織の力にし、財政を支える活動を強める。
- ◇05年は、うたごえ新聞創刊50周年記念の大拡大運動を成功させる。うた新フォーラムを各地で計画的にすすめる
- ◇60周年に向け、うたごえ発ジャーナルとして、うた新フォーラムの全県開催をめざし、また、教育・学習、理論活動を活発にするために季刊「日本のうたごえ」の位置づけを高め、加盟員全員購読を積極的にすすめる。

方針〈5〉 うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

すべての協議会加盟団体に事業部担当を置き、事業普及活動を活発にすすめる

◇05年は、平和を愛する人々の中にもうたごえを届けながら、被爆・戦後60年「平和のうた」事業出版メインに旺盛な普及活動をすすめる。多様な「みんなうたごえ」に役立つ歌集を発行する。

方針〈6〉 歌う喜びを出発点に、いのちの輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を進展させ教育・学習活動をすすめる、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる。

それぞれのサークル・合唱団での教育を日常の練習や実践の中で行うことを重視するとともに、系統的に各種講習会への参加を強める。経験あるリーダーにつづく、中堅、若手リーダーが力を発揮し育っていくように協議会でも計画的にすすめる。演奏・創造活動を豊かに進展させ交流し、批評活動や運動の理論活動をすすめる、力にしていける。

◇05年は、サークル・合唱団の参加を強め、全国講習会を成功させる

◇教育・学習運動を活発にし、21世紀の運動を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

◇日本のうたごえ祭典参加の企画に合わせた全国祭典合唱団、日本のうたごえ合唱団などの参加を強め、日本のうたごえの創造的前進をめざす。

◇合唱指導者会議の開催（全国指揮・合唱指導講習会時）、指揮者教育者会議（グループ）の結成、指揮者連絡会等、教育システムの組織化をすすめる。

方針〈7〉 青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、21世紀をになう青年をたくさん迎える。

青年自らの参加を大切にしながら、文化要求に応える音楽づくり・イベント・青年サークルづくりの計画を持つ。また、うたごえ運動の歴史や理論、うたごえ会・うたごえ喫茶リーダー講習会等を計画する。

◇05年は、青年のうたごえネットワークを広げるとともに、団体、分野を超えた共同のとりくみを重視する。原水爆禁止世界大会での世界青年集会を成功させる。全国交流会の開催とブロック交流会の開催。青年学生部の充実。

◇60周年に向けては、すべての県をつなげたネットワークの確立。全国交流会の継続開催と地方での青年交流会の開催、フェスティバル（仮称）

方針〈8〉 サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

サークル・合唱団を新しくつくり、サークル員・合唱団員を増やし、合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」の読者を増やすことを目標持って計画的にすすめる。

◇05年は、合唱発表会参加団体を60団体増、県うたごえ協議会の確立目標を持ち、新加盟団体30団体に創刊50周年（4/10）までうたごえ新聞新読者1000人を迎え、最高時読者を越える展望を持つ。季刊「日本のうたごえ」新読者を150人迎える。

◇60周年までに合唱発表会参加団体を1300団体に、各年度60団体増

◇60周年までに全県うたごえ協議会を確立し、全国協議会加盟団体を500団体に、各年度30団体増

◇60周年までにうたごえ新聞読者、季刊「日本のうたごえ」読者を過去最高読者数に。各年度うたごえ新聞600人、季刊「日本のうたごえ」1500人増やす。

方針〈9〉 世界の音楽家、音楽団体との国際交流を広げる。

おきなわ祭典を起点に沖縄からアジア、世界への視点で60周年に向かう国際交流の輪を広げる。

◇05年は、解放60周年を迎える韓国との交流はじめ、「アジアの風フェスティバル」の発展とアジアと世界の草の根の音楽交流を広げる。

方針〈10〉 和太鼓と民謡・民舞のネットワーク化とシステム化を促進する。

専門家との協力協同、全国講習会の充実、郷土センターの設立、郷土教育者の組織化・メニュー化、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、ま

おわりに

「私たちをとりまく情勢」「活動のまとめ」で見えてきたように、私たちは、安心してくらせる社会、平和な社会をとねがう人々とともに、うたう活動を展開する中で運動を前進させてきた。

今、日本は、「戦争をする国」に突き進むもうとする憲法九条改悪への動きの中で、教育・福祉・仕事：あらゆる分野で暮らしの破壊が一層すすんでいる。平和を脅かす者を包囲し孤立させる流れをつくる、一人ひとりの平和への思い、平和憲法・九条をまもりいかす声につなげていくために、うたごえを力いっぱい響かすことが今ほど求められているときはない。

被爆・戦後60年の今年、私たちの暮らしの根底にかかわる九条を、「九条って何ですか」という人にもよびかけ、国民過半数の声をうたごえを通してつくり、同時に平和への国際共同行動を力強くすすめるうたごえを広げたい。

世界中に平和の風を起こすうたごえを！

憲法の心を世界に広げるうたごえを！

核兵器廃絶のうたごえを！

◆特別決議◆

被爆・戦後60年、憲法九条をまもり

輝かすうたごえを世界中に！

「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」（日本国憲法 第二章 戦争の放棄 第九条）

第二次大戦による世界数千万人、日本三百十万人余の犠牲の上に、人類がたどり着いた英知・日本国憲法第九条は、今、まさに世界の羅針盤としての輝きを増しています。

しかし、この憲法を国内外に向けて宣言した日本で今、憲法を変えて「戦争ができる国」「戦争をする国」に進もうとする動きが出てきています。戦争は破壊以外の何ももたらしません。戦争する国は、まず戦争への国づくりのために国民の人権、自由を圧殺して、国民を統制していきます。そして、戦争に突入すると生活や、いのちを奪っていくことを私たちの国は9年前に体験しました。

憲法改悪の動きは、ついに、アメリカのイラク侵略戦争に乗じて、平和憲法とは相容れないイラク特措法、有事法制の成立、「復興支援」として自衛隊をイラクに派兵するところまできました。

その中で、思想、言論・表現の自由を脅かす事態も急速に強まっています。3月の卒業式の前に、「国旗・国歌法」を盾にした東京都教育委員会などによる「日の丸・君が代」の強制は、処分を含む教師の斉唱、起立の強要から、さらに生徒の音量まで指示する通達へとエスカレートしています。子どもに愛国心をうえつけ、国の言うがままになる教育を進めようと国会提出がねらわれている、教育基本法改悪案の動きを、私たちは許すことはできません。

また、NHKの内部告発から明るみになった、政府家の介入による番組改編事件は、NHKが、情報操作をして国民を統制していった戦前の歴史を繰り返す危険な動きを具体的に示しています。

被爆・戦後60年の今年、私たちは、戦前の歴史をあらためて学び、戦後60年をどう歩んできたかを問い直し、未来への道標としていかなければなりません。

「原爆はいのちを、健康を、労働を、暮らしを、心を奪ったのです」。時が経っても癒えることのない心身の傷のある被爆者はこう語りました。アジアの人々二千万人の命を奪い、ヒロシマ・ナガサキ、そしてビキニを体験したこの国から、世界の潮流である NO MORE WAR！ NO MORE HIBAKUSHA！を実行するために、私たちは、日本国憲法の心を、核兵器廃絶・平和の願い、心の自由を、「平和のうた」に込めて発信していきます。

2005年2月13日

第38回日本のうたごえ全国協議会総会

